

支援における「答え」はひとつでなくてもいい

先日、三木町文化交流プラザにおいて健康福利課主催による「令和3年度学校における安全衛生管理者研修会」を開催しました。当日は、さんあいクリニック精神科医の三谷理恵先生を講師にお招きし、前半は基調講演に続いて、臨床心理士の廣田邦義先生と「新採カウンセリングから学んだこと」というテーマでトークセッションを行いました。後半のパネルディスカッションでは三谷先生がコーディネーターを務め、パネリストとして廣田先生の外、小学校長会副会長の高松憲子先生、中学校長会会長間嶋浩先生、高等学校長協会会長松木聡司先生にもご登壇いただきました。4人の先生方が感じている学校現場の現状について、率直な意見交換を行っていただきました。研修会後のアンケートでは「学校現場の声に加え、医療や心理といった異なる視点からのお話を聞くことができてよかった」「盛沢山でしたが交流する時間もほしかった」など多様なご意見を頂戴しました。今後の研修会運営に活かしてまいりたいと思うのと同時に、改めてご参集の皆様には感謝申し上げます。



筆者は臨床心理士として、普段はメンタルヘルス不調を訴える教職員の支援に携わっていますが、研修会を通して支援について貴重な示唆をいただくことができました。例えば、不調を抱えている目の前の相談者や職場内で支援にあたっている教職員に対して、そのときどきでどう関わるかという「答え」は、実はひとつではないということです。専門性やキャリアによって見解は異なるでしょうし、時には対立するようなこともあります。支援における「答え」について、第6回自死予防専門研修会報告（一般財団法人日本臨床心理士会雑誌 January, Vol. 28, No2, 2020）において放送大学の倉光修先生は、「支援にあたる者一人ひとりが何をすべきかは、その答えはただちに導けるようなものではなく、様々な立場にある者の実践を真摯に語り合う」そうした機会の重要性を指摘されていました。つまり今すぐ全員が一致する唯一の「答え」を目指して話し合うのではなく、「答え」は一人ひとりの中であって、それがブレないものとして再確認できることが大事です。そのためには、支援における思いを率直に伝え合い交流する場や、支援者同士がお互いの思いを共有し一体感を味わえる体験も重要である気がしました。

以前、筆者が面接を引き受けたある先生のことをふと思い出しました。元々持病のある方で長時間の勤務が続いていたこともあり、学校長からの勧めで面接を受けることになりました。しかしご本人は正直乗り気ではなかったようでした。ある時、「話を聞いてもらっても何もならない」と不満を述べられ、その日を境に面接は中断となりました。校長先生にはそのことをお詫びし、それから約半年が経過したある日のこと。思いがけずその先生から面接予約が入りました。理由を尋ねると「持病の治療で入院することになったが、その前に話をしておきたかった」と、持病の悪化がきっかけであったことが伝えられました。中断したはずの面接が、まさかこんな形で再開するなど思ってもいませんでした。お会いした瞬間、「よく来てくださいました」と深々と頭を下げたことを今でもはっきりと覚えています。臨床心理士である筆者は話を聴くことしかできません。それが無力だと言われることもあります。しかしこれが私にとっての「答え」です。ひたすら話を聴くこと、思いに寄り添いたい一心で話に耳を傾けることが、私にとってのたったひとつの「答え」であり、私が生涯を通して磨いていきたいと願う唯一の専門性なのです。そのことを気づかせてくれた大切な記憶です。

